

柴北川プロジェクト通信 18号

平成23年7月30日(土)・31日(日)

1. 源流米に続いて、「さくらソバ」を長谷の名物に！

6月の田植えから少し間が空いた7月下旬、「愛する会」の渡邊さんから“ソバの種蒔きを30日にやりますよ。種蒔き体験ご希望の方がいらっしゃれば、参加しませんか？ また、盆踊り練習見物も兼ねて、飲み会にもどうぞ。”という嬉しい呼びかけ。あいにく、当プロジェクトの隊長（木寺さん）、副隊長（森脇さん）とも同日は都合が悪く、それでは、と事務局がしゃしゃり出て参加者募集。待っていましたとばかりに、濱田さん、波多野さん、中川さんが手を挙げて、波木を含む4名の応援隊結成とあいなりました。

2. 高台の畑に、願いを込めて種をまく。

■ 現地は、風光明媚な高台の2反の畑

今回は現地集合ということで、めいめいの車で出向き、長谷トンネルを抜け新宿橋を渡ってすぐ右折、渡邊さんの待つ道路端に集結。そこから北の山腹に沿う道筋を数分たどり、「畑ヶ川」という地名の高台に到着。周りを杉の木立が囲み、背後に三の岳など周囲の山々を見渡せる高台の、広々と整地された2反（約20アール）の畑が今回のソバ種まきのご当地でした。



広々とした高台の畑

■ Uターン者の若杉さんの地域おこしから始まった

この畑の持ち主の若杉さんは、若い時分は単身赴任で各地を転々とされ、5年前にやっと故郷の長谷に戻ってこられたUターン者。長い間休耕地としておられたところを心機一転開墾され、昨年からは、ピンク色の花をつけるソバの育成にチャレンジ。種の手蒔きから、育成、草取りなどを殆ど一人で対応され、10月末にはソバ畑が見事にピンク一色に染まり「愛する会」のメンバーも大いに感動。（ブログの柴北川日より2011/11/1号で紹介、右写真）



幻となった昨年のソバ花

今回は、主に種を取って、来年から徐々に長谷の休耕地に広げていこうと目論んだところが、何と、あの一面のそば花全部が、たつた一晩で残らず猪のえさになってしまったそうです。その無念さのなんたるや！

折から、我々共助研も協力して、「山桜」を活用した地域づくりを展開していた「愛する会」の皆さんは、この若杉さんの無念さに深く共鳴するとともに、ピンクに染まるソバの花を「山桜」のイメージと重ね合わせて、長谷名物「さくらソバ」として売り出そうと思い立ち、その育成を今年23年度の「愛する会」の活動テーマに掲げたのです。

そんな背景から、満を持した若杉さんを筆頭に、「愛する会」の主だった皆さん10名が現地に集合し、それに我々4名（実は、ピンクのソバに魅かれた、濱田さんの奥様も参加されて総勢5名）が加わらせていただいた次第です。



ソバづくりに挑戦の若杉さん

■ 手押しの播種機で快調(?)に種蒔き

昨年は1反だった作付面積を、今年は2反に広げるといことで、“2反もの手蒔きは大変だ。いい機械があるから、今年はこちらを使おう!”という「愛する会」からの提案を受けて、暑さも和らいだ夕方 17 時から、播種機2台を使って種蒔きが始まりました。

長谷では「ソバ栽培」をしている農家がないそうで、農業の達人を称する「愛する会」の皆さんも、初めての体験とあって興味津々の様子。急遽ソバ班長となった若杉さんの指導で、畑の両辺から80cm間隔で糸をはり、この糸に沿って参加者全員が交代で播種機を押ししました。

畑の端から端まで柔らかくほぐされた土壌約30mを、播種機を押しして種蒔きをする作業は、見た目以上に力を要する作業です。他の全員が注意深く見守る中、“種蒔きの筋がくねくね曲がっているぞ”“腰が今ひとつ入っとらんぞ”などとヤジが飛び、2往復もすると少し息も上がって、まるで幼児が手押しの歩行器を押している構図のヨチヨチ歩きも散見される始末。途中、三浦さん差し入れの冷えたプラムをほおぼりながら、それでも約束の1時間で畑全体の種蒔きがほぼ完了しました。

このソバの品種「高嶺ルビー」の名を、“高原ビール(?)”と読み間違えるメンバーも出たところで、全員の集合写真を撮って、会場を黒松生活改善センターに移動。お待ちかねの冷えたビールが待っている慰労会に突入しました。

■ ソバの花が開花するまで、これからが本番。

若杉さんは、“しばらく使っていなかったこの畑は、土中の農薬もなくなっている。できればこのまま無農薬で育てたい”という覚悟を示されています。このため開花までには、頻繁な草取りは勿論、発芽時の土かけや苗が育った後の土かけなどの手作業が続くようで、今からが大変だとのことでした。

ちなみに、ソバが発芽すれば、猪対策で畑の周りに電気柵を張る予定になっているようです。

このような大変な苦勞が控えていることを考えると、我々も、秋の収穫までに何度かは、松巖寺前の稲とさくらソバの成育確認に、出向く必要があるように思います。



播種機の準備



播種機を押す中川さん



播種を終えた畑をバックに集合写真（紅一点は、濱田さんの奥様）

3. 種まき後は、久しぶりに地域の方々と交流を

■ 慰労会から、盆踊りの練習へ。

三重の実家で用事があるという中川さんは一足先に帰られ、残る4名が黒松センターでの慰労会に参加しました。福岡からは珍味を持参し、地元の寿司などに舌鼓を打ちながら、冷えたビールをあおって（ただし、濱田さん、波多野さんはその日のうちに帰宅とのことで、波木一人が4人分のビールをいただいてしまいました。濱田さん、波多野さん、申し訳ありません。）地元の方々と交流を楽しんだ後、20時になるとそそくさと片づけし、旧長谷小の体育館に場所を移動しました。



かいた汗の補給と里の味を楽しむ

体育館では、黒松センターからかけつけた三浦さんの太鼓をバックに、渡邊さんが朗々と口説きを唄い、地域の方々が輪を作って盆踊りの練習の真最中。三人ひと組で踊る団七踊りなど七曲が本番さながらに踊られ、地域の方々の盆供養への熱い想いと結束力をしっかり拝見させていただきました。



体育館では盆踊りの練習真最中

■ そして、翌朝は旧長谷小の草切りに参加

その夜は、「愛する会」の大塚会長のお宅に宿をお借りし、近所の三浦さんも加わって、焼酎水割りをいただきながら、少し遅くまで、会長若かりし頃の武勇伝を聞かせていただきました。（ちなみに、会長のお宅は黒松阿蘇神社のすぐ近くにあり、例の映画DMCでの神社シーンには背景として写っています。また、三浦さんのお宅は、主演の俳優さん達の休憩所になったいわくつきのお宅です。）

翌朝は、前夜の酒も抜けてすがすがしい朝を迎え、会長のお姉さんによるもてなしの朝食で腹を膨らませて、7時に長谷小学校に向きました。

黒松青年会主催によるグラウンドと体育館の清掃が、昼までかけて行われるということで、日頃のお礼を兼ねて参加させていただきました。9時までの短時間で、たいした手伝いにはなりませんでした。が、地域の方々とともに早朝の長谷小で汗をかいたことは、今夏の印象深い思い出となりそうです。

（文責：波木）



朝日を浴びながら、グラウンドの草切り



近くの松巖寺前の田では、源流米がスクスクと成育